東方幻想誕

ひかる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方幻想誕

【Ｎコード】
Ｎ４８４３Ｏ

【作者名】
ひかる

【あらすじ】
幻想郷とはどのようにして幻想郷となったのか。
それを幻想郷がまだ、幻想郷と呼ばれる以前の話から捏造していきます。
そして、幻想郷ができた後、どんな経緯を経て現在まで至ったのかをこれまた捏造していきます。
よろしかったらどうぞ。

第一話　博麗（前書き）

え～、二回目の投稿となります。ひかるです。
先日これと殆ど内容の変わらないＳＳを投稿したのですが、再度投稿させていただきます。

このＳＳは東方の二次創作です。独自設定等が含まれてますからそういうのが苦手な方は読まない方がいいかもです。

第一話　博麗

其処は地獄であると誰かが言った。
其処は全てを拒絶するとも。
何時、何処で、誰が、誰に向けて発信したのかは定かではない。
然し、この場合、何時何処で誰がなどどうでもいい事柄なのだ。
ようは其の『全てを拒絶する地獄』が存在するという事実のみが重要だった。
その地獄の名は――――――

昔々、とある東の国の人里離れた辺境に名もなき土地が存在していました。
そこには妖怪と呼ばれる者達が多く住んでいました。
妖怪は人を攫い、襲い、喰らい、糧としております。
そのためその土地は魔の巣窟と畏れられ、たとえ離れていようと人里の人間にとって恐怖の対象でしかありませんでした。
中には妖怪退治をするためと勇み、その魔窟へと足を運ぶ者もおりましたが、誰一人としてそこから帰ってくる者はいませんでした。
人々は日々妖怪を畏れ、妖怪が跋扈する夜を震えて過ごしていました。
然しそんなある日、見た目麗しい一人の巫女が現れたのです。
巫女は云いました。
「私が皆を妖怪の恐怖から解放いたします」
人々は訝しがりました。そんなことが出来るはずがないと。
それもそのはず。これまで人々はずっと妖怪の恐怖に怯えて生きてきたのです。何もしなかったわけではありません。名のある武士

や僧侶など
これまで何人もの人間が同じ言葉を口にし、魔窟に赴いたというのに誰一人として帰ってくる事はなかったのですから。
人々は既に諦めていました。妖怪の怒りを買わないよう日々過ごしていくしか道はないと誰もが思っていたのです。
然し、巫女は引きませんでした。
誰もがやめておけと止める中、巫女はたった一人で魔窟へと姿を消してしまったのです。

そして月日は流れ、人々はとある変化に気付きだしました。
妖怪に襲われる人間が日を追う毎に減り始めたのです。
夜は妖怪の時間です。そのため人々は日か暮れる時間には妖怪と闇を畏れ、皆家の中から出てくる事はありませんでした。
夜中に出歩く者は愚か者であり、妖怪に襲われたとしても自業自得。それが人々の認識でした。
そんなある日、遊びに行ったきり行方不明になってしまった子供が数日後、夜明けと共に変わらぬ姿で里に帰ってきたのです。
人々は大層驚きました。
これまで行方不明になった者が帰ってくる事などなかったのです。皆、口には出しませんでしたが、きっと妖怪に喰われてしまったのだと受け入れ、当然のように諦めていました。
そのため、何故助かったのか、里の皆が気になっていたのです。
そして、暫く経った後、子供は笑顔でこう言いました。
「巫女様が助けてくれました」
里の人々は眼を見開いて驚きました。
巫女と聞いて思い当たる人物は一人しかおりません。
信じられないと誰かが言いました。
お前は妖怪に誑かされていると誰かが囁きました。

言われてみればそれは当然の疑念です。彼等はずっと長い日々を妖怪の恐怖に怯えて暮らしてきたのです。女子供が消えれば諦めるしかなく、たとえ帰ってきたとしても骨と皮だけで中身は無く。運よく生きていたとしても身体の中は妖怪の苗床になっているというのが全てでした。誰にも助ける事はできません。これからもきっと変わる事はない。そう、ずっと思っていました。だから、いきなり希望を与えられても簡単に信じる事など出来るはずもありません。

すると子供が言いました。

自分は妖怪に誑かされてなどいないと。

自分は森で迷っていた所を妖怪に攫われ、運よく巫女助けられたと。

巫女は、恐怖に震えていた自分を優しく介抱してくれたと。

そして、魔窟へ続く山奥に構えられた神社で、私が居るから心配ないと言いながらずっと自分を抱きしめてくれた事等を涙ぐみながら語ってくれました。

里の者は皆困惑しながらも子供の話に耳を傾けました。そして、全てを聞き終わると里の中でも屈強な男を選び、その神社の有無を確認する事となったのです。危険なのは云うまでもありません。然し、里の者達は皆、ついに現れた希望に縋り、確認し、安心したかったのです。

里の男達は森を歩き続けました。誰もこれ程深く山に入らないため木の手入れなどされていないため森は昼間にも関わらず薄暗く、荒れ果てているので道など存在しません。それでも男達は歩き続けました。会話など無く、ただ黙々と。子供に齎された情報に縋り、一刻も早く希望を目にしようと必死だったのです。

夜になれば身を隠すために木の葉と枝の下に身を潜め、日の出と共に再び歩き出す。彼等は一睡もしておりませんでした。とてもで

はありませんが、妖怪のいる森の中で眠るなど出来るはずもなかったのです。

そして、どれだけ歩き続けたでしょう。日数にして四日。不眠不休で歩き続けた男達はとうとう目的地へ辿りついたのでした。森を抜けた先、そこにあったのは真新しい朱色の鳥居。鳥居には『博麗神社』とありました。そこから伸びる石段を疲れなど忘れて駆け上がり、参道へ。彼等の眼に飛び込んできたのは真新しい水舎や社務所、社殿など、まさに神社と云える場所でした。そして、男達はそんな真新しい神社の参道を一人掃除している巫女に釘付けになりました。巫女は彼等に気付くと掃除を止め、笑顔でこちらに歩いてきました。男達は緊張からか硬直したかのようにその場から動けません。

そして。

「私は此処、博麗神社に仕える巫女、博麗霊夢と申します。道中大変でしたでしょう。あなた方は私がお護りましますからどうぞ、お休みになってください」

この一言で男達はその場で座り込み、自然と涙を流しました。まるで幼子のように男達は泣いてしまいました。

これまでどれだけ願っても手に入らなかったモノが目の前にあった。それがどうしようもなく嬉しかったのです。

「有難う御座います、巫女様」

無理やり絞り出した言葉はきっと掠れ過ぎて彼女、博麗霊夢に届いてはいなかったでしょう。然し、何を伝えたかったのか悟った霊夢は笑顔で一度、大きく頷いたのでした。

こうして、人々はついに希望を掴んだのです。

第一話　博麗（後書き）

まず、ここまで読んでくださった皆さん、ありがとうございます。
よろしかったら次の話も読んでやってください。

感想やご指摘があったら嬉しいです。

昔話っぽく書きたかったのですが、難しいので次からは普通になると思います。

第二話　空想（前書き）

第二話の投稿となります。

楽しんでいただけるものを書けるよう頑張ります

第二話　空想

昔々、とある東の国の人里離れた辺境に名もなき土地が存在していました。
そこには妖怪と呼ばれる者達が多く住んでいました。
妖怪は人を攫い、襲い、喰らい、糧としております。
そのためその土地は魔の巣窟と畏れられ、たとえ離れていようと人里の人間にとって恐怖の対象でしかありませんでした。
然し、それは最早遠い過去の事実でしかありません。
百年程前でしょうか。突如として現れた巫女が妖怪の恐怖から人々を解放し、人里の者達は恐怖に震え続ける生活から解放され、それ以降は平穏に満ちた生活を送れるようになったのです。人々は彼等を救った巫女、博麗霊夢に感謝しつつ、平穏な日々を甘受し続けました。

・・・・・・物語が、物語がこれで終わっていたとしたらどれだけ美しかったでしょう。
一人の英雄とその誕生に立ち会った人々のどこまでも綺麗な物語。
妖怪に脅かされない平和な日常に至る物語。
この結末は、誰が見ても幸せな結末そのものなのは云うまでもありません。
然し、物語は終わらなかったのです。
何故なら、其れさえも既に遠い過去の物語でしかなかったのですから。

「博麗神社？　昔話でなら聞いた事はあるが、本当にあるのかね～」
ここは嘗て魔窟と恐れられた土地から最も近いとされるとある人里。そして、かつて一人の巫女によって救われた人里である。
「あるにはあるらしいが、本当にこの里を救ったかなんて怪しいものさ。所詮は昔話だからな」
時間とは無常である。何があろうとその歩みを止める事はあり得ない。たとえどれだけ緩やかであろうとその圧倒的な流れには何者も抗うことは出来はしないのだから。
「それに、今、俺達の里は沢山の僧侶様が護ってくださっているんだ。眉唾物の巫女より余程信頼できる」
博麗神社。その名は既に荒唐無稽の空想と化していた。
何故か。
時間、時代、現状と原因は多々あるが、最たる原因は博麗神社事態にある。
博麗神社。それは魔窟と隣接するかのように建てられていると言われる神社である。何時、誰の手によって建造されたのかは誰にも分からない。昔話によると、子供を助けた巫女の存在を確かめようとした里の男衆がその神社の存在を確認したようだが、それからは誰一人として神社に赴くことはなかったのだ。これは決して里の者達が神社などどうでもいいと考えていたからではなく、巫女自身に言われたらしいのだ。
私が護っているとはいえ、道中は未だ危険が溢れております。ですから今後ここには近づかないようにと。
男衆もそれでは余りにも巫女が不憫だと言ったようだが、巫女は頑なに男衆の願いを頑なに断ったらしく結局、男衆は巫女の言葉をそのまま聞き入れ、里へありのままを伝えたという。
そして、時間は流れてしまった。
事実は時間によって云い伝えとなり、時代によって物語となり、現状から空想へと成り下がろうとしていたのだ。
現在、妖怪による被害は殆どと言っていい程無くなっていた。人

が時代の経る度に妖怪に対抗する術を確立していったのだ。その術は強力で白面金毛九尾の狐や酒呑童子といった大妖を打倒するまでに至っていた。

人とは恐ろしい。妖怪と比べるなどおこがましいほどの寿命しか許されないというのに、その成長速度は目を見張るものがある。

そのため、最早、妖怪は人にとって圧倒的な恐怖の対象ではなくなりつつあり、その力関係は徐々にではあったが、妖怪から人へと傾きつつあったのだ。その昔、魔窟と恐れられた土地に対しても同様で、里の者達はそれ程恐怖を覚えてはいなかった。むしろ、たとえ魔窟から妖怪が現れようと返り討ちにしてやるという自信に満ち溢れているほどだった。

結論を述べれば、空想に頼る必要などなくなった。たったそれだけの事。

人々は博麗神社という存在を空想に落とし必要としなくなっていた。

「俺達は過去の巫女より、今居る僧侶様達を信じているだけだ。それが何か悪い事なのか？」

当然。悪いことのはずがなかった。

過去に縋るより今を一生懸命生きる方がよっぽど前向きで正しい生き方だ。

否定できる訳がない。

こうして、徐々に、然し確実に博麗神社の名は廃れ、後を追うかのように魔窟の存在は忘れ去られていったのです。

第二話　空想（後書き）

ここまで読んでくださった皆さん、ありがとうございます。

次回から紅白の御先祖や賢者様が登場の予定です。

第三話　其処は（前書き）

第三話の投稿になります。

もっとたくさんの人に読んでもらえるよう頑張ります。

第三話　其処は

そこは、廃れていた。年季は入っていたが手入れは行き届き、参拝者の通る参道には落ち葉一つ落ちてはいない。ただ古いだけでは感じる事の出来ない神聖な雰囲気がそこにはある。

然し、廃れていた。どれだけ雰囲気があろうとそこに人気は一切なく、賽銭箱を覗けばもうどれ程参拝者が訪れていないのかよく分かる。

その名は博麗神社。

遠い過去、妖怪に対抗する術を持たなかった里をたった独りで救った英雄の居た神社である。

だが、時代は流れ、人は変わってしまった。

最早、空想と成り下がるのを待つだけの過去の神社。

それが今の博麗神社である。

ただ、無為に時を重ねるのみの神社に意味はない。

信仰の集められない神社に価値は無い。

それは最早、神社であって神社ではないのだ。

然し、そこには一人の巫女の姿を見て取れた。

巫女は美しかった。男であれば誰もが見惚れるであろう艶のある黒髪、意志の強さを感じさせる黒目と整った顔立ちはさながら人形を。そして、赤と白を基調とした巫女服が彼女の神秘性を際立たせた。

巫女は参道を掃除を続けた。誰も訪れた事の無い参道を、ただ黙々と。

彼女こそ過去に人里を救った英雄の子孫。現、博麗の巫女、博麗霊夢である。

「・・・・・・・・・」

巫女は誰も訪れる事の無い参道の掃除を続ける。特に意味は無い。ただ、それが自分のすべき仕事の一つだから。たったそれだけの理

由で巫女は参拝者の現れない参道を掃除していた。
「御機嫌よう、博麗霊夢。今日もめでたく参拝者はいないようですわね」
そこへ唐突に一人の女性が現れた。東洋人とは思えない金髪と白磁のような肌を併せ持った女性は正に絶世の美女と云って遜色は無い。紫の派手なドレスに日傘といういで立ちは奇抜という他ないが、それすらも彼女の魅力を引き立てていた。
「八雲紫か。相変わらず唐突ね。何しに来たの？」
本当に唐突だ。八雲と呼ばれた女性はついさきほどまで誰も居なかった空間に突如として現れたのだ。まるで初めからそこに居たかのように。
霊夢は慣れているのか、特に驚いた様子もなく掃除の手を休めて八雲紫に向き直った。
「冷たいわね。ここでは数少ない来客に対してお茶もでないのかしら？」
扇子で口元を隠しながら紫は眼を細めた。おそらくその口元は薄く笑っているのだろう。思ってもいないことを口にする紫は常にどこか胡散臭い。
「・・・・・・・で？　さっさと本題に入ったらどう？　私もそれなりに忙しいのよ」
「あら、こんな誰も参拝者の訪れない神社が忙しいとはとても思えないわ」
「・・・・・・・・五月蠅いわね。ここはこれでいいのよ」
霊夢は紫を睨む。最後にあんたがそれを言うのかと付け足した。
一見すれば険悪だが、実はそうではない。これは挨拶のようなものだ。
「ふふ。では、さっそく本題に入らせて頂くわ」
紫はクスクスとひとしきり笑うと優雅な仕草で扇子を閉じた。この瞬間、紫は妖怪の賢者としての顔になる。霊夢は常々思う。普段からこの顔で出向くならもう少し対応を考えてもいいのにと。

「今回はね、相談に来たのよ」
「相談？　あなたが私に？　怖いわね。明日は何が降るのか想像したくもないわ」
「酷い言われようね。そんなに私が相談を頼むのは変かしら？」
「変に決まっているでしょう。妖怪の賢者とも言われるあなたが人間に相談を持ち掛けるなんてね」
「あなたは特別よ。博麗霊夢の名を受け継いだのなら理解しているのでしょう？」
「・・・・・そうね、博麗霊夢はあなたの協力者だものね」
二人にしか分からない二人だけの会話。
博麗霊夢という存在の意味。
妖怪の賢者との関係性。
過去にどのような遣り取りが行われたのか。
それは八雲紫と博麗霊夢にしか分からない。
「あなたは知らないでしょうけど、世界は今、人と妖怪という二つの種族の分水嶺にあるわ」
「分水嶺ですって？」
「ええ。あなたの先祖、初代博麗霊夢は妖怪に傾きすぎた天秤を正して人間と妖怪のバランスを保った様に、今は天秤が人間に大きく傾きつつあるの」
「ふ～ん。なら、次は人を退治してバランスを保てってこと？」
霊夢は淡々と恐ろしい事を口にした。人間退治。霊夢と同じ人間であるはずの人間を退治する。それは伝えられる空想とは真逆。巫女でありながら妖怪に手を貸すという事。思ったとしても早々口に出せるものではない。単純に許されるはずがないから。然し、霊夢は口にした。それが必要ならば人間すら退治すると。
「いいえ。事態はそこまで単純ではないわ。人間は力を付けて妖怪に対抗できるようになった。ここまではいいの。でも、人間は力を付けただけじゃ飽き足らず、次は妖怪を幻想にまで落とそうとしている。私はそれが許せない。私の望むものはそんな世界じゃないわ」

人は強くなった。本当に強くなった。いつまでの狩られ続けるのを甘んじるのではなく、その成長速度と智慧を以ってついに妖怪と対等に渡り合うまでに至った。妖怪と比べて儚過ぎる寿命しか持たないというのに。・・・・・・・・・いや、寧ろ、儚いからこそ目を見張るほどに進歩し続けたのだろう。

「でも、私がどれだけ望もうと、世界は私程度の存在に左右される程小さくはないの」

まるで世界を自分の意のままに操っていたかのような発言だ。そんなこと出来るわけもない。紫の言うように世界はたかが一妖怪の手で左右される程矮小ではない。世界を意のままになどと傲慢以外の何ものでもないのだ。

「ならどうするの。博麗の巫女の仕事なんて神社の掃除か妖怪退治くらいしかないわよ」

「そうね。だから私は妥協する事にしたの」

「妥協？」

「そう、妥協。私はこの名も無い土地を私の望む場所へと創りかえる」

然し、紫は諦めない。全てが叶わないのなら叶う範囲で望む世界を創る。

「そして、私の望みを叶えるためにはあなた、博麗の巫女の力が必要なの」

「・・・・・・結界、ね」

霊夢は察した。博麗の巫女の扱う力の一つ。それは結界を成す力。世界を隔離する力と言ってもいい。結界とは大なり小なりそういった効力を持つのだ。そして、博麗の行使する結界は他の追随を許さないほどに強力で強固。おそらく、どれだけ歴史を遡ろうと博麗以上の結界を作り上げる者など存在しないと断言できる程に。

「これはあなたにしかできないことよ」

「あんたの境界を弄る能力じゃ問題があるの？」

霊夢が徐に口にした境界を弄る能力。正確には境界を操る能力な

のだが、これは妖怪の賢者である八雲紫の代名詞とも言える強力な能力である。
　物理的な境界を創る結界は当然のこと、現実と夢といった概念的な境界、果ては物体が個として成立するための「自分とそれ以外の境界」すら操ると言われている。まさに万物の創造と破壊を司る能力と云えるだろう。故に突然目の前に現れるなど朝飯前。境界を弄れば距離など無いに等しいのだから。
　そのため霊夢の疑問は当然で、自分の力が必要だとはどうにも考えられなかった。
「問題があるわけじゃないわ。やろうと思えば私一人の力で結界を敷く事は可能よ」
「なら――――」
「重要なのは人間であるあなたと妖怪である私が協力する事にあるのよ」
「？」
「人間と妖怪。この相容れない二つの種から支持を得るためよ」
「成程。つまり、あんたは妖怪が幻想に落ちる前に隔離するつもりなんだ」
「意地悪な言い方ね」
「違うの？」
「・・・・・・・・・私は、助けたいのよ。世界から拒絶されようとしている妖怪達をね」
　紫はこれまで見せた事の無い程真剣な面持ちで霊夢を見た。
「妖怪の全てが人間に危害を与える訳じゃない。中には心から人間という種を愛している妖怪もいるの。そして、妖怪の拒絶された世界を望まない人間も決してゼロではないわ」
　例を挙げるなら座敷わらしなど人間を愛している妖怪と云えるだろう。妖怪が人間を糧とすると云っても、二つの種族は言葉を交わす事が出来る。
　それはつまる所、分かり合えるということで。共存とは言えない

が、互いの在り方を理解しながらも共に生きていく事は可能という事に他ならない。
「あんたみたいな奴を傲慢って言うんでしょうね」
だが、所詮は可能性。妖怪たちを助けたいという願いでさえも独善。自らの願いを正当化するための詭弁にしかないのだろう。
紫もそんなことは百も承知だ。
それでも――――
「その通りね。私は傲慢だわ。でも、たとえ傲慢だと蔑すまれようと守り続けたい光景があるの。誰にだってあるでしょ？　譲れないモノって」
「私は静かにお茶が飲めるならそれでいいのだけれど・・・・・」
ほんと理解できない出来ないと、霊夢はこれからどれだけ馬車馬の如く働かされるのかを考えてあからさまに大きく溜息を吐いた。
よく分かった。
絶対に紫は譲らない。どれだけ文句をぶつけようと諦めない。きっとそのためならどれだけ卑劣な行為だろうと平然と行うのだろう。それが、よく理解できた。どうにも腑に落ちないが元々、口論でどうにかできるなどと考えていない。嫌味を口にしたのもただの八つ当たりのようなものだ。
ようは紫の思い通りになるのが気に入らなかった。ただそれだけの事。
「感謝するわ、霊夢」
「感謝なんて必要ないわ」
「そう。本当につれないわね。寂しいですわ」
本当に胡散臭い。その一言一言、一挙手一投足が。本当に感謝しているのかも疑わしく思ってしまうほどに。だから、どうしても邪険な扱いになってしまう。
まあ、これに関しては紫のせいだ。この八雲紫という大妖怪は自覚があるにも拘らずまるで自分の性格を改める気配がない。むしろからかって楽しんでいる節がある。故に、やはり紫に対する対応を

霊夢が改める事は未来永劫ないのだろう。
「下手な芝居はいいわよ。用事が済んだならさっさと帰ってくれない？」
「ええ。私にもまだまだ準備があることだし、そろそろおいたまさせて頂こうかしら」
「ならさっさと帰りなさいよ」
「ふふふ。では、最後に覚えておいて。この計画に重要な土地の名を」
「名前？　この土地に名前なんてないでしょうに」
「私の夢を具現させる土地よ。名がないわけがないでしょう」
紫は扇子を取り出すと優雅に嗤って見せた。
そして、紫はじっくりと間をおいた後、その名を口にした。

何時の頃からだろう。

其処は楽園であると誰かが言った。
其処は全てを受け入れるとも。
何時、何処で、誰が、誰に向けて発信したのかは定かではない。
然し、この場合、何時何処で誰が言ったかなどどうでもいい事柄なのだ。
ようは其の『全てを受け入れる楽園』が存在するという事実のみが重要だった。
其の楽園の名は――――――

「――――――幻想郷」

忘れられた幻想の最後の楽園である。

第三話　其処は（後書き）

ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。

第四話　着々と（前書き）

第四話の投稿となります。

完全な説明回ですがよろしくお願いします。

第四話　着々と

幻想郷という楽園を創造するという壮大な計画を聞かされてから早一週間が経とうとしていた。

あれから紫は博麗神社へ訪れてはいない。

訪れたのは紫の式を名乗る狐が現れたくらいだ。

主と同じ艶のある金髪をショートに揃え、道士服を違和感なく着こなした美人。

しかも唯の美人ではない。頭にはピンと張った獣特有の耳を持ち、その腰辺りから長く伸びる黄金の尾は計九尾。

つまりは狐の妖獣ということだ。

しかも、九尾。

妖獣とは尾が多ければ多い程に魔力が高く、長ければ長い程に賢いと言われているのだ。身の丈ほどの尾とシルエットを覆い隠す程の尾を持った紫の式は間違いなく妖獣として最高峰にして最強の部類。

それが博麗神社に現れた狐だった。

「八雲藍とかいったかしらね。また、面倒なのを式にしたものだわ」

呟いて溜息。八雲紫だけでも十分に面倒な存在だというのにとんでもない存在を式にしたものだ。

八雲藍と名乗った式。その正体は伝説にまでなっている大妖、怪白面金毛九尾の狐だ。閉鎖的な空間にずっと居るとはいえ、霊夢にも情報源がないわけではない。ちゃんと知っている。あれは本来なら誰かに従うような奴ではない。人間に退治されたと情報源である紫から聞かされていたが、まさか自分の式にしてしまうとは霊夢も思いもしなかった。

あれだけの大妖怪なら八雲の性を名乗る事を許されたのも納得と云えば納得だ。あれにはそれだけの力がある。しかも式になった事によってさらに強力な存在となっているというのだから面倒以外の

何物でもない。唯一の救いと云えば主のように性格に難があるというわけではなく、主を反面教師としてきたかのような丸い性格をしていた事くらいだろう。
主である紫に絶対服従であるため果てしなくどうでもいい救いではあるのだが・・・・・・
「ほんと、面倒な要求をしてくるわ」
さらに溜息。
もう、本当に溜息が止まらない。

「紫様があなたに依頼する結界の性質。それは、常識と非常識とを隔てる『常識の結界』です」
紫が霊夢の前から文字通り消えて三日が過ぎたある日。いつものように縁側でお茶を啜っていた霊夢の前に現れたのが八雲藍だった。
そして、藍は挨拶もそこそこにいきなり本題へと入ったのだ。
「常識と非常識を隔てる結界ね～。ちょっと漠然としすぎてよく分からないわ」
「より分かりやすく言うなら、幻想郷と外の世界との往来を遮断する結界を創って頂きたいのです」
「外との往来を遮断って事は物理的な結界でいいの？」
分かりやすくはなったが、その程度の結界ならば態々博麗の巫女が創るまでもない。紫ならば片手を使うまでもなくその結界を敷いて見せるだろう。
何が、あなたにしか出来ないことよ、と霊夢は敢えて声に出すことなく内心で愚痴った。
「違います。此の結界はあくまで論理的でなくてはなりません。おそらく、物理的にも幻想郷と外の世界とを隔てる事になるでしょうが、それはあくまで副産物、その本質は概念にも及ばねばなりません」

「概念、ね・・・・・。何となく『常識の結界』の意味が分かってきたわ」
つまり、霊夢に求められている結界とは幻想郷という土地を世界から切り抜き、一つの世界として成立させる結界でなくてはならないという事だ。
外と内。
現実と夢。
真実と幻想。
常識と非常識。
外の世界と幻想郷。
それは、本来有るべき在り方から独立したまったく新しい在り方。
正直、霊夢は紫の理想を甘く見ていた。精々、外から干渉を許さない小さな国を創る程度だと思い込んでいたのだ。
しかし、違う。紫の求めるモノは国程度ではない。
文字通り、世界。
紫は霊夢の隔離という言葉に対し、意地悪な言い方だと難色を示していたが、これは隔離などという次元ではない。これは、乖離。紫は幻想郷を外の世界とはまったく別の、対極に位置するかのような世界に創り変えようと画策しているのだ。
妥協などと口走っていたが何が妥協なものか。世界を一つ創造するなど、其れこそ神の所業。
紫は、神にでもなろうというのだろうか。
「理解が早く助かります。・・・・・で？　肝心の結界は構築可能なのでしょうか？」
「まあ、出来るわね。時間はそれなりに掛かるだろうけど」
「本当に？」
藍の疑っているかのような言い方に霊夢は眉を寄せて不満を露わにした。
「何よ。信じられないっていうなら私は結界なんて創らないわよ？」
出来ないなら出来ないで終わり。意地を張る様な事は絶対にしな

い。
出来ないことを敢えて出来るといって無理に頑張る程、霊夢は熱血ではないのだ。
「いえ、紫様に聞かされていたとはいえ・・・・・・・まさか、人間に其れほどの結界を創り上げれるとは夢にも思わなかったもので」
藍が感嘆の息を吐く。
俄か信じられない。人間にそれ程の所業が可能なのかと思わずにはいられない。
『博麗の巫女』
突如世界に零れ落ちた異物。
妖怪に傾きすぎた天秤に唐突に現れ、たった一人で危ういバランスを保った突然変異。
人の範疇に収まるはずのない絶対的なその力。
世界の意志か、人の願いか、はたまた別の、世界すら知る由の無い未知の意志によるものなのかは分からない。
「出来るんだから仕方がないでしょ」
特に誇るでもなく霊夢は藍の言葉に肯定を示す。
博麗の巫女にとってその程度、誇るに値しないというのか。
「薄ら恐ろしい力ですね」
藍は思う。
主である八雲紫は境界操作という神の如き能力を持っているが、博麗霊夢も同様だ。
まさに怪物。
その手は――――――神の領域にさえ届くというのか。
「五月蠅いわね。用件はそれだけなの？　無いのならさっさと結界の構築を初めたいのだけど」
「あっ、いえ。用件はそれだけではありません。紫様の協力者であるあなたには幻想郷の在り方を伝えておくようにと仰せつかっています」

「在り方？」
「ええ。紫様は世界を創造しようというのです。協力者であるあなたにはその世界を把握する義務があるかと」
「ふ～ん。別に興味はないけど、いいわよ。どうせそう命令されている以上、話すまで帰らないだろうし」
霊夢は式など不憫でしかないと考える。
いくら式になった事であらゆる面で強くなろうと、所詮は命令通りにしか動けない人形。意志があるように見えても其処に藍の意志は無い。それのどこがいいというのか？　好きな様に思考し、行動できないなどと霊夢には絶対に耐えられない。縛られるのなんて御免被る。
霊夢は好きな時にお茶を啜って煎餅でも齧っていられればそれだけで満足なのだ。
自由。
何故それを態々捨てる必要がある？
何故それで満足出来ない？
霊夢にはそれがまったく理解できなかった。
まあ、態々聞こうとも、聞きたいとも思わない。答に興味がない。藍がそれでいいのならそこで終わり。霊夢の思考はそこで完結するだけの事。
今はただ、藍の言葉に耳を傾けた。
「我々が創り上げる幻想郷。謂うならばそこは妖怪を天下とする世界になります。然し、だからと云って妖怪が支配する世界では意味がありません。それでは過去の二の舞になりかねない。故に社会の構築が求められるのです」
「社会？　何それ？」
「その説明は長くなりますから割愛しますが、簡単に纏めるならば、人間と妖怪の在り方の規定とでもいいましょうか」
藍は続けた。つまり、人間が妖怪を、妖怪が人間を侵害しないためには土台となる規定が必要なのだと。厳密に文書にする必要はな

い。ただ、それを知っている者がそれぞれの側の頂点にいさえすればいいのだと。
幻想郷とは楽園なのだ。幻想郷が楽園であるためには同じ志を持った者が必要で、同じ志を持った者が居れば幻想郷を楽園として保とうとする。
それ即ち、愛。
楽園に対する愛が幻想郷には必要不可欠で、何よりもそれが重要なのだ。
「現在、人間側の頂点に最高峰の知識を持ち、且つ、転生によって幻想郷の歴史を変わらぬ愛を持って編纂していけるであろう稗田家を。そして、妖怪側の頂点には妖怪でありながら既に独自の社会を持ち、且つ、人間への理解もある天狗を据えるつもりでいます」
「稗田に天狗って・・・・・よくそんな奴等が紫の計画に参加する気になったわね」
天狗に関しては実際にやり合った事もあるのでよく知っている。天狗とやり合うのは本当に骨が折れた。妖怪でありながら徒党を組み、それぞれの天狗には明確な役割が与えられているためか、知性が高く狡猾で、当然の如く身体能力も高い。加えて中には神格化された天狗も存在するため単純な実力だけでも十分な脅威となるのだ。
そんな天狗が紫の計画に参加。
正直、何か企んでいるのではないのかと勘繰らずにはいられない。
そして、稗田も天狗程ではないが霊夢は知っていた。
稗田家とは稗田阿礼を祖とする歴史家のことだ。歴史家としてはまだまだ歴史は浅いが、稗田阿礼は一度見た物を忘れないという奇特な能力の持ち主であったため、その脳内に蒐集された知識は凄まじく、一代にして稗田家を歴史の名家として押し上げたらしい。そして、何より特筆すべきは稗田阿礼が転生するという点にある。稗田阿礼はその一生で培った知識を無駄にしないために生まれ変わる事を選んだのだ。転生とは言うほど容易い行為ではない。生きている間は閻魔に転生の許しを乞わなければならないばかりか、死後は

新しい肉体を与えてもらうために数百年余年の間、閻魔の下で働かなければならない。苦痛であり、苦行でしかないだろう。然し選んだ。阿礼はその苦痛と苦行を苦悩することなく選んでみせた。
そして、現在、見事、稗田阿礼は閻魔から転生を許され、生まれ変わった。
それが現在の稗田家当主、稗田阿悟となるわけだ。
稗田阿悟は代にして五代目。稗田阿礼が五度にも渡って転生した姿である。
ちなみに初めての転生体である稗田阿一の代から豊富な知識を書物に纏めているらしい。その内容はただの歴史から妖怪へ対する特徴や護身法なども細かく記されているらしく、多くの人間の役に立っているらしい。
人間側の頂点としては申し分ないだろう。
天狗と稗田。双方に幻想郷への愛があるかは甚だ疑問ではあるが、最良の選択といえよう。
「稗田家の者達は喜んで紫様の計画への参加を希望してきたしたよ。どうにもゼロから歴史の編纂が関われるというのが魅力的だったようで」
「へ～、もの好きも居たものね」
「確かに、然し、紫様は気に入られたようです」
「別に文句なんてないから」
紫様紫様紫様。事ある毎に紫様。霊夢はそんな藍の反応に辟易していた。
「では続けます。次は幻想郷の機能についてです」
「・・・・・続けていいわよ」
藍は生真面目に霊夢の反応を待っていたようだが、霊夢としてはあまり気にするなというのが本音。きっとこれ以降の話は殆ど門外漢。話を聞いても理解できなければ意味がない。意見を挟む箇所なんてないはずだ。そのため霊夢はお茶を一人啜る。さっさと帰らないかしらと、霊夢は内心で愚痴って熱を失いつつあったお茶を啜っ

てお茶受けの煎餅を齧った。
「幻想郷に必要な機能、それは生と死の循環です」
「幻想郷のためだけの閻魔を据えるってわけ？」
「はい。幻想郷が成立した暁には死後の魂さえ管理していく必要があります。でなければ世界としての機能を保つ事は不可能でしょう」
「それを紫が？　出来るの？　相手はあの閻魔よ？」
「当然です。紫様に出来ぬ事などありません」
途方もない信頼だ。藍の中で八雲紫という妖怪はもはや神に等しいのだろう。
然し、相手は閻魔。魂の審判を司る地獄の裁判官だ。
幾ら紫といってもそう容易く話が付けれる相手ではない。
「根拠は？」
「紫様には閻魔に恩を売る秘策があるのです」
「へ～、あの閻魔にね～」
半信半疑といった所だ。
霊夢はこれまでに一度だけ閻魔に会った事がある。そして、その印象はめんどくさい、だ。人の話になどまったく耳を貸すことなく説教をし、勝手に白黒を付けて去っていく、自己中心的な断罪者。それが閻魔だ。
めんどくさい。
霊夢には閻魔が紫の話を話を聞き入れるどころか、聞く場面すら想像できなかった。
「ま～、私は紫みたいに口が達者じゃないから想像も出来ないわ」
「当然です。何者であろうと紫様を測れるはずがない。無論、閻魔とて例外ではありません」
霊夢の知る所ではないが、現在、人間が大幅に数を増やしているため只でさえ魂の審判が滞っているため地獄は深刻な人手不足ならぬ、閻魔不足に陥っている。そこに幻想郷のためだけの閻魔を寄越せというのだ。紫の要望が罷り通る道理は無い。
だが、紫には秘策がある。地獄の現状。そこに付け入る隙がある

のだ。
「紫様は必ず交渉を成立させてくるでしょう」
藍はそう言って何やら主を誇るかのように満足気に頷いた。
霊夢はそんな藍の姿を横目にお茶を啜る。
世界の在り方とやらは粗方把握した。だからといって何か非難があるわけでも賛同があるわけでもない。否定と肯定など必要ない。ただ、受け止めるだけだ。
「では、最後に、一つだけ」
「何？」
「あなたの協力に感謝を。あなたが居たからこそ幻想郷は完成したのですから」
藍はそう言って慇懃に頭を下げると、私にも役割があると言って足早に博麗神社から立ち去った。
霊夢としては特に感謝される謂われは無いが、相手が勝手に感謝しているとうのだからその厚意を受け取らないでもない。然し、感謝の意を示すなら頭を下げるのではなく賽銭の一つでも入れていけと藍の背中に向けて呟いた。

第四話　着々と（後書き）

ここまで読んでくださった皆さんありがとうございます。

どんどん独自解釈や設定がでてくるとおもいますがよろしくお願いします。

感想やご指摘が頂けたらありがたいです

第五話　鬼（前書き）

第五話の投稿となります。

感想いただけるように頑張ります。

第五話　鬼

唐突だが、博麗神社に参拝者が訪れる事はない。どれだけ参拝者が訪れていないかと問われれば、解答に窮する。とりあいず現、博麗の巫女である博麗霊夢がこれまで参拝者を見た事がないくらいには参拝者は訪れていなかった。

「賽銭箱は今日も空っぽ。一度でいいからいっぱいになった賽銭箱を見てみたいものだわ」

博麗霊夢はぼやく。大勢の参拝者が沢山の賽銭を賽銭箱に投げる光景を夢想して。

もう一度言うが、参拝者が訪れた事はない。

然し、決して来客がないわけではない。

博麗神社は魔窟との隣接という凶悪とも言える立地条件のため普通の人間が訪れる事は全くないのだが、その代わりに妖怪やその妖怪を退治しようという普通ではない人間が訪れる事はあるのだ。

最後に客と呼べる者が訪れたのは十日程前。客の名は八雲藍。人間ではなく妖怪の賢者である八雲紫の従順な式である。

神社としてそれはどうかと思わなくもないが、おそらくこの現状が好転する事は無いだろう。

そして、今日はそんな博麗神社にとある客が訪れた。

「お～い。お前さんが博麗の巫女かい？」

賽銭箱を覗きこんでいた霊夢に届いた声は酷く幼い少女のものだった。

その声に霊夢は振り返る。

「何、あんた？」

そこに居たのは本当に少女だった。身長は霊夢の胸ほどしかない程の矮躯。服装は袖を肩から破ったかのような着物に紺のスカート。手首には三本の鎖が絡みついており、そこにどんな意味合いが含まれているのかは分からないが、絡みつく三本の鎖には丸と三角と四

角の分銅がそれぞれの鎖の先端についていた。そして、何より霊夢の眼を引いたのは栗色の綺麗な長い髪、ではなく、その栗色の頭から生えた二
本の長く鋭利な角。
そう、角だ。
少女の頭から生えているのは紛う事無き角。その意味が、妖怪退治を生業としている博麗の巫女に分からないはずがない。
「私は伊吹萃香。鬼だよ」
「えっ、鬼？　嘘でしょ？」
驚きは少々。霊夢は大抵の出来事に感情を露わにする事は無い。全て受け止めてしまうから。そのため霊夢は掴み所がない。何を考えて何を思っているのか全く分からないからだ。
然し、確かに霊夢は驚いた。顔には出ていなかったが、それでも声に出して嘘か確認してしまう程度には驚いていたのだ。
「鬼は嘘を吐かない。嘘を吐くのはいつだって人間さね」
自称鬼の伊吹萃香は腰に括り付けていた青い瓢箪を手にして口を付けた。そして、グビグビと音が聞こえてくるほど豪快に瓢箪の中身を浴びるように飲んでゲップを一つ。
「・・・・お酒臭いわね」
霊夢は顔を顰めて鼻を摘む。二人の距離は二メートル程だというのにその強烈な酒気は嗅ぐだけで酔えそうなほど強い。
「いいだろう。この伊吹瓢には酒虫という酒を生む特別な虫の体液が仕込んであってね、いくらでも酒が出てくるようになっているのさ」
「別に羨ましくないわよ」
「そうかい。そりゃ残念だ」
特に残念と思っていないのかカラカラと笑ってさらに瓢箪を煽る。
「何しに来たのよ？」
用があるのならさっさと用件を言えばいいのだ。用件があるにも関わらず用件など言わずに美味そうに酒を飲む。失礼ではないか。

さっきは癪だったので羨ましくないと言ったが、正直、羨ましいに決まっている。酒が無限に出てくるのだ。羨ましくないはずがないだろう。言うまでもないだろうが、参拝者はいない、よって賽銭という収入のない博麗神社は貧乏なのだ。

それでどうやって美味い酒を飲めというのか。

当然、飲める訳がないだろう。

一日の最後に飲む酒を霊夢がどれだけ楽しみとしているかこの萃香は知る由もないだろう。

霊夢の萃香への羨ましいという想いは徐々に苛立ちに、そして、終には理不尽な怒りへと変化しつつあった。

「ぷあっ。今日も今日で酒が美味いね～。もうここ数百年は素面だった記憶がないよ～」

萃香は首が据わっていないかのように頭を前後にふらふらさせて、足元みふらふらとおぼつか無い。当然、霊夢の話をまったく聞こえていないようで話がまったく前に進まない。

「用がないなら帰りなさい」

「まあまあ、固いことを言うものじゃない。せっかくだし一緒に飲まないかい？　自慢じゃないが、私の酒は美味いんだよ」

「・・・・・・飲むわ」

「あっはっは。聞いていた通り肝の据わった奴みたいだね。面白い、どちらが先に潰れるか勝負といこうじゃないか！」

酒の魅力は偉大である。

「あはははっ。萃香、お酒が足らないわよ！」

「あっはっはっは！　いや～、良い飲みっぷりだね～霊夢。だが、まだまだ飲めるのは私も同じだよ！」

二人だけの宴会が始まってから早二時間。極悪に高いアルコール度数を誇る酒をまるで水の如く飲んでいるというのに、二人の勢い

は未だ衰える兆しが全く見えなかった。
萃香が伊吹瓢を持ち上げて豪快に霊夢の盃にドボドボを注いだ。
「こんなにお酒を飲んだのは本当に久しぶりだわ。あ～、幸せ～」
何とも安い幸せではあるが、それが霊夢の偽りない本心。
霊夢は注がれた酒を一息に飲み干してぷは～と大きく息を吐いた。
「ふふ。鬼と酒を飲み交わして幸せとは、聞いていた以上に面白い人間のようだね～」
萃香は上機嫌だ。何をしに来たのかは未だ話さないが今この瞬間を楽しんでいるのは間違いないだろう。
「ほら、あんたも飲みなさいよ」
霊夢が萃香の伊吹瓢を引っ手繰って萃香の盃にダバダバと豪快に注いだ。
萃香も応えるかのように盃の酒をキューっと一気に飲み干した。
「あはははははっ」
「あっはっはっはっ！」
盛大な笑い声が真昼間の社務所内に木霊する。
それにしても、この二人は在り得ない程酒に強い。鬼の萃香はまだ納得できるだろうが、人間である霊夢の酒の強さは異常という他ない。然し、それもある意味納得かもしれない。霊夢は巫女なのだ。巫女は神霊の声を聞く為には酒を飲む。そしてその声を人々に伝えるという役割がある。ある意味、酒を飲むのが仕事とも言えるのだ。推測でしかないが、もしかしたら普通の人間よりも多くの酒が飲めるように訓練をしているか、アルコールに対する耐性が常人よりも遙かに強いのかもしれない。
「それにしても、何しに来たのよ？　ただ、お酒が飲みたかったってわけじゃないんでしょ？」
さらに酒を煽って霊夢は萃香に問い掛けた。特に意味はない。ただ、本当に何となく聞いただけ。このまま酒を飲み続けても霊夢は一向に構わない。鬼である萃香の用とやらがどんなものであろうと霊夢にはまったく興味がないのだ。だが、話題にはなる。酒に酔っ

た頭で思い付いた話題が萃香が博麗神社に訪れた理由だった。
「いやね、実は私は霊夢もよく知ってる妖怪、八雲紫の友人でね～」
「へ～、紫に友人なんていたのね。意外だわ」
言いたい事ははっきりと。
思った事はきっぱりと。
本心を口にして何が悪い。
紫に対して失礼にも程がありすぎるが、霊夢は言葉を余分な衣で覆うようなことは絶対にしない。霊夢は嘘を吐かない人間で、その在り方はまるで鬼のようだった。
「あはははは！　確かに紫の友人は面白いがその分、物凄く疲れるんだよ」
「でしょうね。今日来たのは紫絡み？」
重要な話にも関わらず二人の酒の勢いはまったく衰える様子はない。口を開き終わる度に一杯ずつ酒を飲み干し続けている。
「ああ、そうだよ。ここに来た理由は紫が創る幻想郷とかいう世界で妖怪の頂点に立ってくれと頼まれたからでね～」
「あら、それって天狗じゃないの？」
「私達鬼が断ったからね。その代わりだろうさ」
「へぇ～、どうして？」
「だって、紫には悪いが、面白くなさそうじゃないか。
妖怪の天下？　笑わせる。我等鬼はそんなモノに興味は無い。
我等が幻想に消える？　上等だ。出来るものならやってみるがいいさ。
鬼は不退だ。正々堂々と真正面からやり合って消えるならそれも一興。本望だね」
鬼とは何時の時代でも人間の敵だ。人を攫い、酒を強奪し、人々の生活をいつだって掻き乱して脅かしてきた。そして、人間はいつだってそんな鬼と戦ってきた。幾ら圧倒的な力を以って膝を折ろうと、その都度立ち上がり、絶望すら乗り越えてきた。
そんな人間を在り様を鬼は好ましく思っている節がある。

だから、一切手を抜かない。戦うというのなら正面からぶつかった。時には長年の研鑽の末鬼退治を身に付けた者に鬼が敗れる事もある。

鬼は素直にそんな人間の姿を見て感服していた。

さすがだと、それでこそと人間だと讃えた。

鬼は人間を愛していたのだ。

だからこそ、紫も本来は鬼に妖怪の頂点として在って欲しかったのだろう。

鬼ならばいつまでも人間の敵であり続けるという確信があったのかもしれない。

加えて、現在の天狗が創り上げた社会は鬼の社会の名残でもある。鬼こそ纏まりに欠ける妖怪の中で社会を創り上げた先駆者。その強大な力と組織力を以って天狗すら部下として従えてきた妖怪の紛う事無き頂点。鬼以上の適任者が存在するはずがない。

然し、屈折した人間への愛故に鬼は紫の誘いを断固拒否した。

鬼は常に人間に脅威に晒してきた。そして、人間はどれだけ絶望的な状況になろうと、常に真正面から鬼と向き合ってきた。

だというのに、いざ人間が鬼の脅威となったら尻尾を巻いて逃げろという。

出来るはずがない。

人間に対して、我が身可愛さから逃げるなど鬼の矜持が許さない。

好敵手である人間に対してそんな不誠実な態度を取るなど出来るはずがなかった。

「御立派な考えね。私にはそんな死にたがりな考え方は出来ないわ。だって人と妖怪じゃ事情が違うじゃない。人が退かなかったのはただ、怖かったから。鬼の存在は見て見ぬ振りするにはあまりに強大すぎただけじゃない」

そうだ。人はどこまでも鬼を畏れていた。その力、その在り方、その存在其の物が余りにも強大で脅威で害悪だった。だから戦う事を選んだのだ。

鬼のように好敵手などと思った事は一度もない。
「でも、鬼は違う。人をこれっぽっちも畏れていない。退いて助かるなら退けばいいじゃない」
「嫌だね。退くなどという言葉は鬼の中には存在しない。それに理由はどうあれ人間は鬼と戦う事を選んだ。それは例え恐怖が根底にあろうと我等は讃える。それは間違いなく勇気だ。恐怖だけでか弱いはずの人間が我等鬼と戦う事を決意出来るはずがない」
「なら御勝手に。鬼の往く末なんて私にはどうでもいいわ」
霊夢はそれで話は終わりとばかりに盃を萃香につきだす。言外に注げと言われているのがよく分かる。萃香はそんな霊夢の態度に苦笑を一つ。そんなきっぱりとした霊夢の在り方が有難くもある。霊夢は鬼の在り方を否定も肯定もしない。どこまでも客観的に物事を見る事のできる広い視野を持っている。決して踏み込み過ぎない。故に鬼の矜持を傷付ける事もない。
霊夢はまるでそこに居てそこに居ないかのようだ。謂わば空気のように、然し、確かにに其処に居る。
どこまでも不思議な存在。
暖かくなければ冷たくもないその態度。
不思議な居心地の良さで萃香を包み込む。
これが博麗の巫女かと、萃香は得心がいったかのように小さく笑みを浮かべて頷いた。
「悪いね。感謝するよ博麗霊夢」
差し出された盃に酒を注ぎ足しながら萃香はなんとなしにお礼を一つ。
「だったら賽銭でも入れてきなさい」
「はっはっはっ！　賽銭は無いが、礼代わりに私と力比べでもしないかい？」
どんな理論だ。
どう考えても鬼との力比べが礼代わりになる訳がない。
「いいじゃないか。鬼は力比べが好きでね～。強い奴を見たら試し

てみないと気が済まない性質なんだよ」
「結局、自分の願望じゃない」
霊夢は注がれた酒を一息に飲み干し、代わりに萃香の盃に並々と酒を注いだ。そして、めんどくさいから嫌よと言って萃香の頭を軽く小突いた。
「まあまあ、鬼に目を付けられたのが運の尽きだと諦めなよ」
からからと屈託ない笑みを浮かべて萃香は酒を飲み干した。然し、霊夢との力比べを諦めた様子は一向にない。やる気満々である。
「萃香と力比べてしても私に得がなでしょ。諦めるのはあんたよ」
「い〜や。諦めるのは霊夢さ。それに、霊夢にも得はあるよ」
「何よ？」
「私と力比べをしてくれるなら、いつか我等が人間に忘れ去られ幻想郷へ流れ着いた時、我等は人を攫わないし、襲わない。地下にでも籠って隠居すると約束するよ」
「殊勝な心掛けね。それにしてもさっきとはまでと違って随分と弱気じゃない」
「どれだけ虚勢を張っても、このままでは鬼は幻想に消える。これは間違いないからね」
鬼である萃香がそう言った以上、きっと鬼は幻想となるのだろう。鬼は嘘を吐かない。取り繕わない。良くも悪くも真直ぐなのだ。そして、幻想に落ちた鬼は例外なく幻想郷に流れ着く事になるだろう。幻想郷は全てを受け入れる楽園だ。たとえ鬼が幻想郷を拒否したとしても幻想郷は拒否などしない。
「負けたら潔く去るのは当然だろう。我等の存在はその程度だったのだと認めるしかない。その後どうなろうと文句はないよ」
ほらっと萃香は霊夢に伊吹瓢を掲げた。
「さあ、私の酒を受け取ってくれるかい？」
この行為は今までのような酒盛りを意味しない。
これは、契り。
鬼との約束とでもいおうか。これまでの酒盛りのように軽くはな

い。
霊夢はは～っと大きく溜息を一つ。
「分かったわよ。その時が来たら余計な仕事を増やすんじゃないわよ」
「うん。やっぱり霊夢は良い奴だ」
霊夢が差し出した盃に酒を注ぎ、自分の盃にも酒を注ぐ。そして、二人はその盃を軽く掲げると一気に飲み干した。
「「げふ～」」
同時にゲップをして二人は立ち上がる。
「お酒を持ってくるならいつでも歓迎してあげるわよ」
霊夢は自分の胸辺りにある萃香の頭をグリグリと撫でる。
「さて、次に会うのは何時になる事か分からないが、その時は盛大に宴会をしようじゃないか」
「そうね。良いお酒を期待してるわ」
向かう先は幻想郷となる魔窟の中。そこでなら全力で力比べが出来るだろう。

第五話　鬼（後書き）

ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。

それとお気に入り登録してくださった方、本当にありがとうございます。

自分でも気持ち悪い程テンションあがりました！

第六話　約束（前書き）

遅くなってすいません。第六話の投稿となります。

戦闘が・・・・戦闘描写が、書けない。相当の難産でした。

第六話　約束

そこは異界と化していた。
場所は幻想郷となる森の一画。森の中で在りながら不自然なほどに生き物の気配を感じさせない其処はまるで世界から切り取られたのではと感じさせるほどだ。
其処から、地響きと共に轟音が森中に木霊する。
「はあああああっ！」
震源地は伊吹萃香。その矮躯から振り降ろされた拳は信じられないことに地面を陥没させ、小規模の地震すら起こしていた。
これが鬼。
これが鬼の力。
人間ならば身体が崩壊する程の衝撃すら耐え得る金剛石の如き肉体と、その金剛石すら破壊し得る規格外の怪力。
人間が対抗するには余りにも次元の違う存在。
人間がその脅威を無視できないのも頷ける。鬼への恐怖と周囲に刻まれる惨状は正に天災。人間程度にどうにか出来ると思考することすらおこがましい災厄。
「っち」
然し、それでも人間はたとえ天災だろうがいつだって向き合ってきた。何度土地を、食物を、人間を蹂躙されようといつだって眼を逸らすことなく抗ってきた。根付く恐怖を糧に人間は己を奮起させ、対抗するための知恵を、策を、術を、いつだって絞り出してきた。
そして今、その天災に対抗するは巫女。
人間が天災から身を護るために生み出された存在。
人間が導き出した答えの一つ。
巫女、博麗霊夢は手にした札を萃香に投げ付ける。
「無駄無駄っ！」
その札を萃香は片手で全て撃ち抜く。並の妖怪ならば触れるだけ

で消滅させる札は然し、萃香の拳に火傷すら負わせる事は叶わない。
「その程度かい、霊夢！」
「うっさいわね。ただの小手調べよ」
霊夢は間合いを大きくあけて先程の倍の札を萃香に投げ付ける。
「またそれかい！？　そんなもの、鬼には通用しないっ！」
萃香は札を気にせず霊夢へ疾走する。霊夢の投げた札がまるで意志でもあるかのように不規則な軌道を描きつつ、追尾するかのように一枚残らず萃香へ肉薄し、その身体を蹂躙せんと殺到する。
在る札は鋭利な刃の如く萃香の髪を一房切り取るが、肌には傷一つ付けることはない。
在る札は束縛するかのように萃香の身体を大地に縛り付けるかのように張り付くが、数瞬でさえ動きを止める事はない。
在る札は萃香の身体に張り付いた途端に爆発するが、鬼の勢いを止める事さえ叶わない。
「馬鹿みたいに頑丈ね」
まさに規格外。頑丈だとか怪力だとかそんな言葉では表しきれないほどに純度の高い純粋な暴力。
「まずは、いっぱあああああつ！」
霊夢に無造作に振り上げた拳をなんの工夫もなくただ、叩きつける。
鬼に技術など不要。技術など弱い者が強い者に迫るために作り上げられたモノに他ならない。鬼にとって強くなる為の工夫など弱者の思考回路。
生まれながらの絶対的強者。
それが、鬼。
だが、忘れてはならない。工夫をしないという事はつまり、停滞以外の何物でもない。鬼は生まれながらにして戦うための全てを持っているがために、努力をしない。背後から迫る存在に対して見向きもしない。故に、背後から一歩ずつ迫る存在に気付きもしない。
生まれながらの絶対的強者。その特権は鬼だけに与えられるもの

ではないというのに。
存在するのだ。
人でありながら人でない。
人の器に収まり切らない程の力を持って生み出された異端が。
「舐めんじゃないわよっ」
それが、目の前に居る存在、博麗の巫女、博麗霊夢なのだ。
霊夢が懐から取り出した四枚の札を投げる。
「警醒陣っ！」
展開されるのは小規模な陣。四枚の札を基点とした物理的な隔たりを形成することに特化した博麗の巫女のみに許された防御結界。
萃香の拳が霊夢の警醒陣と真正面から衝突する。
「っ！」
驚愕は萃香。地面すら割る萃香の全力の拳は霊夢の敷いた警醒陣に罅一つ入れる事は叶わない。
「流石だ。面白いっ！」
萃香は壮絶な笑みを浮かべると構わず拳を何度も警醒陣へ打ち続ける。衝突するたびに轟音が木霊し、踏み込む足は大地を陥没させ、巻き起こる風は周囲の木々をざわめかす。
「馬鹿の一つ覚えね」
然し、それでも霊夢の警醒陣は打ち破れない。普通に考えればここは一度退くか、回り込むかする場面だというのに萃香は殴るのを止めない。これが鬼だ。これが鬼のやり方なのだと、己の存在を誇示かのように一心不乱に真正面から幾度も殴りつける。
「鬼は不退。何度も言わせるんじゃないよ！」
「なら、これで終わりよっ」
霊夢から昂る霊力。その眼に見えるほど迸る霊力に萃香は武者震いを感じ、笑みを深めた。
「こいっ！」
そして、それは来た。
「夢想封印っ！」

霊夢の宣言と共に周囲に現れた無数の光の玉。その一つ一つに込められた霊力は妖怪十匹を消滅させて尚、余りある程の破格。
これが博麗の力の一端。その能力は限定的な封印。この光弾に呑まれた者を妖怪の嫌う光と光弾の炸裂による衝撃で傷を与え、例外無く込められた術式により封印するという博麗の巫女が妖怪退治に用いる封印術の一つ。
それが一斉に萃香へと殺到した。

「ふう・・・・・。少し、やり過ぎたかしら？」
霊夢の放った夢想封印。手加減したとはいえ、それが刻んだ大地への傷は絶大だった。周囲の木々は衝撃の余波で薙ぎ倒され、大地は捲れ、爆心地には十メートル以上に及ぶ巨大なお椀状の穴が出来あがっている。
「・・・・・・・・・妙ね」
未だに土煙りの蔓延した穴を霊夢は覗き込む。
霊夢の予想では穴の底には萃香がいるはずだ。あれだけ至近距離で放ったのだから外れる道理はない。
然し、霊夢は眉間に皺を寄せた。
「手応えが無い？」
そう。手応えがまったく感じられなかったのだ。夢想封印とは単純に物理的な衝撃を与える技ではない。その真価は敵を封印するという能力に集約されるのだ。だというのに、萃香を封印した感覚が無い。封印してしまえば霊夢にもそれを感知する事が出来るはずで、いつも通りならば満身創痍で喘いでいるの妖怪が穴の中心に封印されているはずなのだ。
「まさか、外した？」

視界を遮る煙を掻き分けながら霊夢は浮いた。
然も当然のように宙に浮いたのだ。霊夢にとって特に驚く事ではない。霊夢にとって空を飛ぶというのは当然の事。俗世に赴けばその一種の超能力と呼べるそれがとれだけ在り得ないものなのか分かるのだが、人里へ下りた事すらない霊夢がそんな俗世の現状を知るわけもない。
そして、空を飛ぶという事象はあらゆる存在に許された能力という訳ではない。それこそ妖怪や魔法使いといった一部の種族にしか許されない特別な能力なのだ。人間でありながら空を飛ぶ。それだけでも十二分に異端。奇跡でも起こさない限りありえてはならない事象。巫女だからなどという理由は理由になりえない。それでも、敢えて理由を付加するのなら、博麗の巫女だからと言えるのかもしれなが・・・・・
閑話休題。
大地から解放された霊夢はふよふよと漂うかのように浮かびながら穴の下へと降りる。夢想封印が直撃していればその先には封印された萃香がいるはずだ。
それにしても――――――
「何かしらこの煙。土煙り・・・・じゃないわね」
視界を覆う煙。夢想封印によって巻き上がった土が土煙りとなって視界を塞いでいるものだと霊夢は考えていたが、どうやら違う。全く晴れる気配が無いのだ。寧ろ、その煙は霊夢の身体に纏わり付いてくるかのように徐々にその濃度を上げているように感じられた。
霊夢はその煙に何となく嫌な予感を感じ、一度穴の外に出ようと高度を上げようとしたその時、突如としてそれは――――――牙を？いた。
「――――――――っ！！」
煙を掻き分けて眼前に迫る巨樹の幹程もある巨大な拳。霊夢はそれを咄嗟に敷いた結界で辛くも凌ぐが、そのあまりの衝撃まではどうしようもなく、穴の外へと容赦なく吹き飛ばされて乱立する樹の

一つへ背中から勢いよく衝突した。
「くぅっ！」
その衝撃に霊夢は顔を顰める。呼吸が荒くなり、視界は霞み、手足は一時的にしろ言う事を聞かないほどに重い。
いくら常人より大きな力を内包した博麗の巫女とは云え、その身は所詮人間。妖怪からしたらどうもしない衝撃だろうと容易く壊される程に脆く、儚いのだ。
「油断大敵だね～、霊夢」
聞こえる声は間違いなく萃香のもの。
霊夢は霞む視線の先、そこに土煙りだと思っていた煙が集束していき、徐々に人型を成していくのを見た。
「何よ、それ？」
掠れた声で霊夢は呟く。
集束した煙が成した型は紛う事無く萃香のもの。
霊夢は目の前で起こった現象に対して問い掛けると、萃香は伊吹瓢を煽ると豪快に笑って木にもたれかかって荒い呼吸を整えている霊夢の前にドカッと胡坐をかいて座ると話を続けた。
「あっはっはっはっ！　これが私の能力、密と疎を操る力さ」
「密と疎ですって？」
「そうさ。私が常に身に付けている分銅には其々意味がある。丸は密を司り、三角は疎を司り、四角は私自身を司るって具合にね」
「つまり、その分銅さえ――――――」
「おっと、これを付けてるから能力を発動できるってわけじゃないから勘違いをしちゃいけないよ？　私が此の分銅を常時身に付けているのは私という存在を表わすためだからね。ほら、どうせなら伊吹萃香という鬼を人間に記憶に刻みたいじゃないか」
これは、有り体にいえばただの装飾品だよ、と萃香は付け足した。
「話が逸れたね。本題はこの分銅が私の能力を示しているという所だ」
霊夢は素直に萃香の話に耳を傾けながら身体の回復を図る。これ

まで様々な能力を有した妖怪を退治してきたがやはり鬼は別格。油断大敵だと萃香は口にしたが正にその通り、霊夢は明らかに油断していた。華奢な体躯に油断したのか、その子供の様な雰囲気に油断したのか、はたまた自分が負けるはずがないと驕っていたのかは定かではないが、油断していたのは事実。でなければ鬼相手に手加減など出来るはずもない。

霊夢は内心で舌打ちを一つ。

余りにも無様だと霊夢は自分を客観的に見てそう思った。

普段はやる気とか闘争心だとか向上心といった感情とは無縁だが、霊夢にだって悔しいと思う事はある。それは紫に楽しみにしていた御茶菓子をスキマで霞め取られた時など、状況は全く違うが悔しいと感じたり怒りに震えたりもするのだ。

だからだろうか？　今、目の前で行われている萃香の講釈は霊夢の油断に対する皮肉にも聞こえてしようがない。

なぜなら、これ程の好機が何処にあるというのか？

萃香を満身創痍にするはずだった霊夢が逆に満身創痍という状況で態々自分の能力を教えるなど馬鹿にしている以外の何物でもないではないか。拳を軽く振り降ろすだけで霊夢の負けは決定的だというのに。

だから、教えてやらねばならない。

「つまり、私は密と疎を操る事でさっきみたいに身体を霧状にしたり巨大化させたり出来るってわけさ。その気になれば霧になってこの土地全て覆う事が出来るし、私達鬼がが統治していた山だって崩す事が可能だよ」

「あ〜、もういいわ。分かったわよ。あんたが凄いのは良く分かったから――――」

少し黙りなさい。

霊夢は講釈を終えた萃香を鋭い眼光で睨みつけ、未だ震える膝を無理やり喝を入れ立ち上がる。

もう、先程までの油断はない。

膨れ上がる霊力が先程までと比べモノにならない。
「全力の力比べがお望みなら退治する気でやってやるわ」
その瞬間、萃香の全身が震えた。
「っ！？　・・・・・・・・凄いのは霊夢も同じさ。今、私が感じたのは武者震いじゃなくて、間違いなく恐怖だったよ」
だが、萃香は退かない。一歩たりともその場から立ち退かない。霊夢に呼応するかのように妖力を昂らせ、敢えて獰猛な笑みを浮かべて霊夢を真正面から見据えた。
「私をやる気にさせた事、後悔するんじゃないわよ？」
「いいね。ここからが本当の力比べだ」
空気が、凍る。
ざわめいていた森が一転して静まり返り、周囲から音を消しさる。
手を伸ばせば触れ合えるような距離で二人は睨み合う。
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
合図は、無い。
「八方鬼縛陣っ！」
「ミッシングパワーっ！」
然し、霊夢が天へ掲げた掌を振り降ろし、対鬼用に即興で創り上げた陣が発動したのと萃香が内包する妖力を解放し、全身を巨大化させたのは全くの同時だった。

それから数刻後、緑の多い茂る豊かな森の一画は、今や更地と化していた。
「はあはあはあ・・・・・・・あ～、疲れた」
「はあ、はあ・・・・・こんなに暴れたのは何時以来だろうね～」

更地となった中心には、満身創痍状態で力無く寝そべった二人がいた。互いに服はボロボロで髪はぼさぼさ、全身痣と汗と土塗れでとてもではないが見れた状態ではない。然し、心から疲れたという表情をしている霊夢とは対照的に萃香の表情はどこまでも澄み切った空のように晴れやかだった。

「まったく、どうするのよこの有様？　紫に気付かれたら絶対に面倒な事になるわよ？」

霊夢は大きく溜息を吐く。ここは遠くない内に幻想郷となる土地の一部なのだ。謂わば紫の理想の一部と云えるだろう。もし、その土地の一部が更地になったなどと紫が知ったらと考えると面倒で堪らない。

「はっはっはっ！　それは嫌だけど、どうしようもないね。やったものは仕方ないと紫には諦めてもらうしかないよ。でも、紫なら私達がぶつかった時から気付いていても何らおかしくないから問題無いのかもね」

萃香の言葉に霊夢はう～んと唸りながら考える。萃香の言葉は強ち間違いとは思えない。紫は自身の能力である境界操作を用いて何処に居ようとその光景を覗く事が出来る。萃香に霊夢の場所を教えたのが紫だとするならこの事態になるのを考えていないとは思えない。

なら、

「確かにそう――――――――」

「でもないですわ」

唐突に霊夢の言葉に被さる第三者の声。

瞬間に凍った霊夢と萃香の表情がその人物が誰かを物語っていた。

「げっ、紫」

「お、お～、紫じゃないか」

言うまでもなく、八雲紫その人である。

「随分と派手に力比べをしたものですわ。萃香は兎も角として霊夢はこの土地が私にとってどれだけ大事なのか理解しているはずだと

思っていたのだけれど？」
　わざとらしく扇子で顔を隠してさめざめ泣く素振りに霊夢は口角をピクピクと引き攣らせ、萃香は苦笑を浮かべた。
「仕方ないでしょ。文句なら吹っ掛けてきた萃香に言ってよね。私は元々やる気なんて無かったんだから」
「それはおかしいよ、霊夢。お前さんも途中からやる気になってたじゃないか」
「それも萃香のせいでしょう。それに力比べも萃香があんな事言うからじゃない」
　交互に責任を押し付け合う二人を見て紫は溜息を一つ。
「喧嘩両成敗ですわね」
　パチンと指を弾く紫。
「「えっ？」」
　そして、寝そべっていた二人の下の地面が裂け、裂け目から覗く無数の目玉と手が二人を呑み込んだ。
「スキマの中で少し頭を冷やしなさいな」
　そんな紫の呟きは二人に届く事はない。

　次に二人が目覚めた時、二人の眼に映ったのは博麗神社の社務所の天井だった。
「くぅ～、相変わらず、紫のスキマは慣れないわね。気持ち悪いったらないわ」
「同感だね～。あの上下左右の感覚の無い空間はお酒とは違った酔いで頭が痛くなるよ」
　頭に手を添えて二人は盛大に息を吐いた。
　そして、そのまま一刻程まったく動く様子を見せなかった二人だったが、人間と比べて回復力すら優れているのか、萃香が緩慢な動作で身体を起こして眠ってしまった様子の霊夢を見つめた。

「・・・・・ありがとう、霊夢。我等鬼はもうすぐこの土地から居なくなる。そして、人間が鬼を忘れ去った時、きっと幻想郷へ流れ着く事になるだろう。約束は守る。その時は絶対に鬼は人を攫わないし、襲わない。誓うよ。私はこの約束を未来永劫、絶対に忘れない」

まるで慈しむような優しい笑みを浮かべて萃香は霊夢の頭を撫でつける。

「霊夢は好ましいよ。私はこれまで人間から霊夢の様な視線を向けられた事がない。あんなに楽しく人間と酒盛りをした事がない」

鬼は戦う事でしか人間と語ってこなかった。それも血で血を洗うような闘争だ。霊夢の言ったように人間は鬼に対して恐怖しか抱いていなかった。その負の感情は常に感じていたモノだ。萃香自身、それだけの事をした自覚はあるが、許しを乞うつもりなど毛頭無い。

だから、笑い合いながら酒盛りなど出来るはずがないのは当然で、どうしようもない事。

「私はどう思われようが人間が好きだ」

――――――――人間がどれだけ鬼を嫌っても。

萃香は正直、霊夢に酒を飲まないかと誘った時、断られるだろうと確信していた。出来る訳がないと確信しながらも敢えて聞いた。

でも、萃香は確かに霊夢と笑い合い酒盛りをした。くだらない話題で笑い、どちらが先に注がれた酒を飲み干せるか競争もした。

不思議な気分だった。

これまで人間に抱いていた思いとはまた別の、むず痒い思いを霊夢に対して抱いた。

その思いとは何か？

簡単だ。

「その中でも、私は霊夢の事が特別大好きになったよ」

萃香が博麗神社を訪れた真の目的、それは興味が沸いたから。

紫から聞かされた幻想郷という楽園の中核を担い、妖怪の天下で在ると知りながらも、それを肯定した存在に。

何故鬼に、妖怪に恐怖しか抱いていないはずの人間側である存在がその楽園を肯定するのか。
どんな奴なのだろうかと。
知りたくなった。
結果は、語るまでもない。
萃香の目的は霊夢が酒盛りに応じた時点で遂げられていた。
「だから、遠からずこの土地を離れる事になるけど、偶には此処に来て酒を飲んでもいいだろう？　霊夢は、鬼である私が初めて出会った人間の、友人なんだ」
萃香は頬を気恥ずかしそうに掻きながらそう一方的に思いを告げると立ち上がって霊夢に背を向け、別れも告げるつもりはないのか、社務所の外へと歩き出した。
「・・・・・・・・・・また来なさいよ。約束、したでしょ」
背後から聞こえた声。距離があるため小さくはあったが、確かに萃香の耳に届いたその声。
「うん。上等な酒を沢山持ってくるよ」
萃香は博麗神社に来てから一番の笑顔を浮かべると伊吹瓢に入った酒を豪快に飲んだ。
酒がこれほど美味いと感じたのは何時以来だろう。
「今日は、本当に酒が美味いね～」
萃香は霊夢との約束を思いながらニヤ付くと仲間達のいる山へと飛んだ。

然し――――――――――この約束が果たされる事は無かった。

第六話　約束（後書き）

ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。

次回は、フラワーマスター登場を予定しています。

多分、今回ほど遅くはならないでしょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4843o/

東方幻想誕

2010年11月27日03時55分発行